

源叔父（國木田獨歩）

明治中期、九州の佐伯の港に源叔父と呼ばれる渡守がゐた。若い頃は俠氣をどきぎと美聲故に浦々に迄名を知られ、美聲に惹かれた美しい娘を妻に迎へ、一子幸助を儲けて幸せに暮してゐたが、幸助が七歳の時、妻は二度目の産が重くて死ぬ。源叔父は「笑ふこともまれに、櫓こぐにも酒の勢ひならでは歌は」なくなる。妻の死は「彼が心を半ば碎き去」つたのだが、その五年後、今度は幸助が海で溺死する。源叔父は「物言はず、歌はず、笑はずして年月を送」る様になる。處が、五十路の坂を越えた頃、彼は「紀州」と呼ばれる白癡はくちで乞食の少年を家に引取る。紀州は八歳の頃、乞食の母と佐伯に来て、母に捨てられ獨り乞食暮しを續ける裡に、母の事をも忘れて了ひ、今は「恨みも喜びもせず、たゞ動き、たゞ歩み、たゞ食ふ」野良犬同然の毎日を送つてゐたが、或る雪の夜、襪ばらを纏まとつて慄へつつ彷徨さまよふ彼を源叔父は哀れみ、連れ歸つて面倒を見てやる事にしたのである。

そんな或日、渡船の客が源叔父に、何も乞食を引取らなくてもよからうにと云ふと、「紀州は親も兄弟も家も無き童なり、我は妻も子もなき翁なり。我渠かれの父とならば、渠我の子となりなん、共に幸ならずや」と源叔父は眩く。客が哀れんで、親子の情愛が二人の間に生ずれば樂しからうと云ふと、源叔父はいかにも嬉しげに「聲高らかに歌ひ」始める。海も山も源叔父自身も絶えて久しく聞かなかつた歌聲だつた。

然るにその晩、源叔父が歸宅すると紀州がゐない。外を彷徨つてゐるのだ。漸く探出して連れ戻り、飯を食はせて寝かせるが、翌朝、源叔父は高熱を發して床に伏す。「そなたの父はわれなり」と紀州に云ひながら、まどろんで、悪夢にうなされ、目覺めると、またしても紀州がゐない。源叔父は絶望の餘り縊ひれて死ぬ。その後、或る人が紀州に源叔父の縊死いしを告げると、紀州は「たゞ其人の顔を打うちまもりしのみ」だつたといふ。

獨歩によれば、源叔父も紀州も彼が自ら「言葉を交はし其身の上に就つき深く同情を持ちしことある」實在の人物で、元來は無關係だつた二人を結附けて初めて作品が出来たといふ。獨歩は「忘れえぬ人々」なる作品に於て、「生の孤立を感じて堪へ難いほどの哀情を催す」人生の種々相を描いたが、源叔父も紀州も詰りは獨歩の「忘れえぬ人々」なのだ。しかも源叔父の切ない

思ひは紀州にはつひに届かず、「生の孤立」の感懐はいやが上にも募らざるを得ない。

源叔父の妻の死後、佐伯の「港開けて車道でき人通り繁く」なる。近代化の餘波である。だが、源叔父はそれを「うれしともはたかなしとも思ふ様」を見せない。慰められぬ悲哀を抱へる源叔父にとつて、近代化の進展なんぞは餘所事よそごとでしかない。それに又、相手が白癡であらうがなからうが、昔も今も愛した相手が愛を返してくれるとは限らない。詰り獨歩は、時代の變遷に關はりなく、人が人たるが故に耐へねばならぬ悲哀を何時迄も忘れまいとした譯であり、それが獨歩の「文學のふるさと」(坂口安吾) だったのである。

處で、この獨歩の小説家としての處女作を、「詩趣ある」作品として森鷗外は逸早く評價したが、「源叔父」の「詩趣」は、文語文ならではの措辭やリズムと切離しては考へられない。昭和二十三年、日夏耿之介は「鷗外と露伴」にかう書いた。「文語の小説形式を、さながらうち碎かれた名鐘のごとく棄て去る國民は、その癡その愚世界に類なく、之を嗤ふは、卻つて心あり學ある外國人のみである」。